

博士論文 (社会科学, 2011年3月) 要旨

近代化遺産「運用」にみる「国家」に収斂されない「地域」

Reconsideration of the Relationship between the Nation and Locality in the 'Operation' of Modern Heritages

山本 理佳 YAMAMOTO Rika

本論文は、近年の日本において急速に増大している「近代化遺産」を、現代的な国家支配の一端を示すものとしてとらえ、その具体的な様相を明らかにすることを目的とした。既存の社会科学分野の近代国家研究では、文化遺産が国家を象徴的に強化するイデオロギー的役割を担う点について数多く明らかにされてきた。とくに日本では、国家イデオロギーが強力に作用する要因として、地域における人々の実践をとらえる傾向が強い。しかし、グローバル化が進展し、国土内の空間編成も大きく変化する現代においては、そうした国家イデオロギーを強力に実践する場としての地域は、もはやほころびを見せ始めているのではないか。本論文では以上の問題意識から、地域における実践をより詳細にとらえることを目的として、「運用」という具体化の次元に着目した。そしてその微細な次元での地域における実践は、必ずしも国家に資する方向のみではないことをとらえ、現代の文化遺産構築における国家と地域の関係性の再考を論じた。

論文構成

はじめに

第Ⅰ部 本論文の目的と枠組み

第1章 問題意識と目的

第1節 現代的国家支配とは

第2節 「近代化遺産」と現代的国家支配

第2章 本論文の視点と分析枠組み

第1節 地理学における物的諸相の国家イデ

オロギー作用をとらえる研究

第2節 「近代化遺産」という今日の国家支配をとらえる視点

第3節 具体的分析対象・手法と論文構成

第Ⅱ部 北九州市における産業施設の「近代化遺産」化

第3章 産業施設の「近代化遺産」化の国家／地域「運用」

第1節 高炉保存をめぐる概要

第2節 住民らにとっての高炉保存

第3節 高炉を「日本」のシンボルとする国家的運用

第4節 住民らの「近代化遺産」運用

第4章 近代重工業都市における「地域」の変容

第1節 高炉保存運動をめぐる地域的展開

第2節 「八幡」における製鉄所の地域支配

第3節 製鉄所支配の終焉と「八幡」から「北九州」への空間再編

第4節 まとめ

第Ⅲ部 佐世保市における軍事施設の「近代化遺産」化

第5章 軍事施設の「近代化遺産」化の国家／地域「運用」

第1節 佐世保市の地域概要と「近代化遺産」をめぐる問題

第2節 軍事基地存在を正当化する「近代化遺産」運用

第3節 住民らの「近代化遺産」運用

第6章 米軍の空間占有の正当化をめぐる歴史

的諸相

- 第1節 駐留米軍の動向と佐世保市における返還志向
 - 第2節 軍事的空間占有を正当化する市行政の言説実践
 - 第3節 佐世保市における「米軍」という暴力的占有の顕在化
 - 第4節 まとめ
- おわりに

論文要旨

本論文はⅢ部構成となっている。第Ⅰ部では本論文の問題意識と目的、および依拠する分析枠組みについて述べた。続く第Ⅱ部および第Ⅲ部はその分析枠組みを用いた実証結果であり、それぞれ北九州市（福岡県）と佐世保市（長崎県）の事例をまとめた。

第Ⅰ部では、まず第1章で本論文が「近代化遺産」を現代的国家支配の一端を示すものとしてとらえることの必要性を明示し、第2章でそのための分析枠組みを立てた。

ここでの現代的国家支配とは、国土とかい離れた国家の実質的活動（政治・経済）が進行する状況、すなわち現代のグローバル化期における国家支配のことである。多くの社会科学的研究において、このことと表裏一体で進むとされているのが、文化主義的側面での国家イデオロギー作用の強化である。いわば政治経済活動の脱国土化とともに国土が形骸化してしまうところを、様々な言説・イメージ等により文化主義的に国家アイデンティティを構築し、強化を図ろうとする状況が多く見られる。

こうした動きの中に位置付けられるのが「近代化遺産」である。日本においては、ちょうど1980年後半より国内企業の多国籍化が進行するが、そのことと並行して国内文化政策がこれまでにない規模で活発化する。これら文化政策の中核的なプロジェクトとなっていたのが「近代化遺産」の構

築であった。「近代化遺産」は1988年から全国調査の事業化が進行し、またその保護を念頭においた登録文化財制度が1996年に発足した。とくにこの登録文化財制度はこれまでの日本の文化財制度の「少数優品主義」という原則を大きく転換し、文化遺産の多量化・大衆化を促進させるものとなった。

こうして「近代化遺産」が国家の趨勢から政策的に生み出されている現代的状況を踏まえ、第2章では文化遺産の国家イデオロギー性をとらえてきた先行研究をもとに、本論文がとらえるべき側面を浮き彫りにしうる分析視角を検討した。

まず、地理学における景観の国家イデオロギー性を追究する研究において、とくにその先進的研究群を形成してきた欧米と日本の国内研究とを比較して、日本では国家イデオロギーの権力的な作用のみに照射する傾向が強く、そこに大きく関わっているものとしてイデオロギー実践次元としての地域があることを示した。すなわち、欧米では国家と対立や齟齬をきたす次元として設定されてもいる「地域」が、日本では「郷土」概念にもとづく国家イデオロギー実践に代表されるように、「地域」が国家を支持する強力な媒介項とされている。このことは日本において現実的にみられる特徴ともされるが、近年においてはアカデミックな視線の偏向として批判されてもいる。ことに本論文が対象とする現代的国家支配においては、国土にもとづいた厳格な空間編成をしていた近代国家期とは異なり、脱国土化が実質的に進行する中でイデオロギー的に国土や国家アイデンティティが強調されるという矛盾した事態が展開されている。こうした中で日常的な現実を具に見つめる次元である「地域」について、むしろ国家を支持しない、齟齬をきたしたり対抗する側面に照射していく必要がある。

ただし、「近代化遺産」の実践には極めて多様な主体が多様な関わり方をしており、またその変容ぶりも目まぐるしい。同じような対象であるイギ

リスの産業遺産について、J・アーリ (アーリ 1995) は大局的に観光資本・富裕層の権力的作用によって構築されているものとしての見方に対し、大衆・地域住民層の主体的構築によってなされている側面を指摘する。いわば、現代のポストモダニズム的状况において、抵抗的实践は極めて明確化しにくい形で存在しており、単に「近代化遺産」構築に至る制度的側面や最終的に価値づけされ、シンボライズされる権威的側面を大局的に見るだけではとらえきれない。

そこで本論文では、実践主体が、実はその概念や制度を具体化する細かな次元において、各々幅のある意味や方向性をもたせた豊かな実践を行っている、ということを描したM・ド・セルトー (ド・セルトー 1987) の視角をもとに、その具体化の次元に着目するべく、「運用」という概念視角を導入した。いわば「近代化遺産」の保存という制度的には同じ形であっても、それをどのように「運用」していくかは主体によって様々である。たとえば国家のシンボルとするのか、労働の過去を顕彰するものとするのか、といった価値づけのあり方から、観光資源として売り出すのか、それとも別の形かといった実質的活用の方向性まで、多様な「運用」がある。本論文は以上のことを前提として、これまで偏向のみられた国家と地域の関係性を再考することとした。すなわち「近代化遺産」を構築する地域における実践をその「運用」次元まで細かくとらえ、それが国家に資するような運用か、あるいは国家には収斂されない独自の地域的運用であるのかという点を明確に分けて論じることとした。本論文の主眼は、とくに後者の国家には収斂されえない地域を浮き彫りにすることにある。

本論文の対象地域は近代国家成立の支柱となった北部九州とすることとし、北九州市 (福岡県) および佐世保市 (長崎県) を選定した。この2都市は、近代以降の国家の実質的基軸である資本および軍事それぞれの拠点として機能してきた地域で

ある。そしていずれの地域においても、企業の生産拠点の多国籍化や軍事の集団安全保障体制の強化といった現代のグローバリゼーションの影響を多分に受けてもいる。すなわち、北九州市 (主に八幡地域) は製鉄産業の拠点として機能し続け、さらに近年の大規模合理化の対象地域ともなっている。また佐世保市は明治期に海軍の主要軍事拠点の1つとして成立し、戦後には米軍基地をも擁することとなり、近年、その米軍基地は拡大されている状況にある。いわば、現代の国家の実質的変容を直接的に経験する中、またその都市成立の歴史的経緯から「近代化遺産」の国家イデオロギー性も強く作用するはずの地域における実践の有様をとらえることは、本論文の目的に最も適ったものといえる。なお、北九州市では製鉄所の操業開始に関連する施設である東田第一高炉、そして佐世保市においては米軍基地内に存在する赤煉瓦倉庫建造物群、すなわち現役の軍事施設をその対象として取り上げることとした。両地域とも1990年代、「近代化遺産」を構築していく動きが活発化している状況にあるが、ここでの対象施設はいずれもその中核的・シンボリック施設といえるものとなっている。

調査は主として「近代化遺産」の保存に関わる活動に参加しながらの取材、またそれらに取り組む人々 (住民、行政職員等) への聞き取り、様々な行政資料や新聞記事、歴史資料等、広範囲におよぶデータを対象とした。またそれらのデータは、佐世保市においては1996年8月から2009年7月までの期間、北九州市は2001年5月から2006年末頃までの期間、いずれも数年にわたる断続的調査から得られたものである。

以上の分析枠組みから対象をとらえた結果、そこには国家的な運用とは明確に異なる、あるいは抵抗性をも含んだ地域独自の運用が明確に存在していることが明らかとなった。そのことを、事例ごとの成果を示した各部の前半 (第3章、第5章) にまとめた。

まず第3章の北九州市の事例では、高炉が公的には近代日本を支えた、国家共同体のシンボルとして構築されていく過程を明らかにした。ただし、もともと高炉は1989年に所有者の新日本製鉄株式会社に取り壊しを表明したのに対し、地域内で強い反発が起こり、その後5年の論議を経て1994年に市への移管による保存が決まったものであった。ここで保存を訴えていた多くの住民らの意図は、企業による高炉取り壊し、ひいては企業の地域切り捨てに対する抵抗というところにあった。さらに、筆者が行った2003年の彼らへのインタビュー調査の結果では、企業に対する抵抗という歴史的事実を象徴するものとしての意義が高炉に新たに付加されていたことがとらえられた。いわば、彼らの高炉保存の意義はやすやすと国家には収斂されえず、10数年を経てもなお維持されていたのである。このように、彼らは高炉の「近代化遺産」としての保存のうえに、国家的文脈とは異なる形での独自の運用を行っている実態が明らかとなった。

さらに、第5章の佐世保市における軍事施設の「近代化遺産」化は、とくに日本という国土自体を補強するようシンボライズされるよりも、地域における米軍の存在意義を強調するような方向への国家的運用が主流となっている。それはとくに、米軍基地内建造物の保存状況の良好さにより米軍の「優秀な保存管理主体」としての側面が強調されるようになったところからきている。こうした国家的運用は、学識経験者や専門家、行政、軍、そして住民らも巻き込みながらなされていく一方、ただし住民らの中にはそうした方向とは真逆の米軍用地返還を志向しつつ「近代化遺産」化活動を行う者も見られた。彼らは、これまでほとんど立ち入ることもできなかった基地内に、「市民（地域住民）の権利」としてアクセスすることを可能にするツールとして「近代化遺産」をとらえてもおり、そうした地域独自の運用が展開されている側面をとらえることもできた。

加えて、各部の後半（第4章、第6章）においては、北九州市、佐世保市ともに、その依って立つ地域そのもの、あるいは資する方向としての国家自体が、脱領域化する国家支配の中で変容している側面を詳しく掘り下げ、これまで前提とされてきた親密な国家—地域の関係はそもそも成立しなくなっていることを明らかにした。そこには、自己完結しなくなった「国家」のもとで再編されていく「地域」という新しい「国家」と「地域」の出現があった。

第4章の北九州市の事例においては、まずは高炉保存に向けて働きかけを行った住民らの地域的基盤について、検討を加えることとした。その結果、保存に向けての活動において中核的な働きをしていた住民は、とくに旧来の八幡という、製鉄所の影響力の強い地域ではなく、1963年に新たな行政区域として成立した北九州市という新たな「地域」を基盤として活動を行っていたことが明らかとなった。1970年代以降、製鉄所は企業合併および高度成長後の構造的不況の影響を受け、老朽化地域でもある八幡の大規模な合理化をおし進め、それまで厳格な統制による支配を成立させてきた八幡地域の空間構造を崩壊させていた。そこに新たに成立していた北九州市内部での商業を中心とする空間再編もなされた。こうした八幡地域自体の歴史の変容の中、高炉保存運動は、製鉄所の影響力が相対的に弱体化した北九州市という「地域」を基盤としていたことが明らかとなった。

一方、第6章の佐世保市においては、軍事力正当化の大義とされる「国家防衛」の国家が大きく変容していることをとらえた。とくに戦後、アメリカ資本主義陣営の防波堤的拠点としての役割を担った日本では、軍事拠点のおかれた地域からみると、「国家」にはいつの間にか米国（軍）という存在が紛れ込んでいた。ことに佐世保においては、1960年代の米軍艦艇の寄港反対運動において、その「国家」とは何を守り、防衛するのか、という命題に対する矛盾が露呈する事態を引き起

こしてもいた。その後冷戦体制が崩壊すると、米軍の地域受容はこれまで以上に必須のものとなり、中でも佐世保は在日米軍拠点として重要度を増してきた。そうした状況において米軍の存在意義のアピールにうまく呼応するものとして持ち出されてきたのが「近代化遺産」である。一方、その「近代化遺産」保存に携わる住民の中には、対象の歴史的建造物が機密空間としての軍事基地内に存在することに対し、「自分たち地域の遺産」という形で、基地内に立ち入り、またそれらの返還を求めていく根拠として、「近代化遺産」を持ち出す状況もとらえられた。さらに1960年代の寄港反対運動を間近にとらえた経験をもつ住民は、軍事が防衛対象とする国家に米軍が入り込んでいる矛盾を強く批判してもいた。現代的国家が抱える矛盾は、住民の目にも受容し難いものとして映っていたのである。

いずれも、文化遺産や景観をめぐるイデオロギー性を追究してきた研究群で設定される傾向の強かった、国家―地域の親密な関係性は、実質的に変容していることを示すものといえる。

以上のように、本論文においては、国家と地域の関係性に着目しつつ、「近代化遺産」の構築過程を明らかにした。まとめでは、これまでの日本の地理学の景観研究における、地域実践の国家への収斂という固定化した追究視角に対し、国家に収斂されえない地域実践の存在を明示し、その関係性再考の必要性を提示しえたことを、本論文の意義として示した。

本論文が対象としたのは、「近代化遺産」が内包する「近代日本」の呼びかけに、最も率先してこたえてくるはずの、近代都市の典型である北九州市と佐世保市である。近代国家を最前線で支えてきたその歴史から、現代の「近代化遺産」構築において最も忠実に国家的運用を行うであろう両地域において、国家とは相いれない地域志向の文化遺産運用が確認できたことは、多くの地域・場面での「国家に従順な地域」という関係性の再考を

迫るものとなる。

さらに本論文では地域と国家、それぞれの実質的な内実の変容も指摘した。しかもここで示した変容は決して個別事例にとどまるものではない。先進工業国における国内産業空洞化が招く、資本がこれまで創り上げてきたまとまりある地域の変貌や、多様な分野で国家が自己完結しなくなってきた状況下においては、国家の求心性は著しく低下しているであろう。このような新たな「地域」と「国家」の出現は、これまでの国家イデオロギー作用をとらえる研究で前提とされていた、国家―地域の親密な関係性の崩壊を招いている。とくに今日、現代のナショナリズムを近代国家形成期のそれとは区別し、新たな視角から追究する必要性が主張されており、以上の国家―地域の実質的变化への着目はその現代的ナショナリズムの解明に必要な不可欠であると考ええる。

さらに、本論文では「近代化遺産」構築における「運用」という具体化次元に着目したが、このことは以上の実態を浮き彫りにしえたのみならず、「近代化遺産」をめぐる本研究の今後の課題、ひいては現代の様々な現象の解明に極めて有用なものとなる。本研究の今後の課題は、まずは国家―地域関係のみに集約されえなかった多様な側面に取り組んでいくことにある。たとえば「近代化遺産」には本論文で掲げた以上にもっと多くの重要な主体が関わっており、とくに観光資本や関連団体、観光客など、影響力の強い主体に照射した分析は喫緊の課題である。また、本論文では「地域」を重要な枠組みとして括ったために、逆に住民内の多様な背景による差異を考量しえなかった点も、早急に取り組むべき課題である。そして、文化に関わる現代の様々な現象は、極めて変転めまぐるしい状況にあり、微視的・動態的側面の炙り出しを必須とする。「近代化遺産」をはじめとするイデオロギー装置の「運用」は具体化の次元における主体ごと、状況ごとの多様な行為、方向性を明示しうる概念視角であることから、今後多く

の実態や問題の解明に資するものとする。

引用文献

- アーリ, J. (加藤宏邦 訳) 1995. 『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局.
- ド・セルトー, M. (山田登世子 訳) 1987. 『日常の実践のポイエティック』国文社.

初出誌一覧

- 山本理佳 2001. 都市佐世保における軍港イメージ創出のメカニズム. お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科提出修士論文.
- 山本理佳 2005. 新聞報道における「市民運動」の構築—北九州市の高炉保存をめぐる動きから—. 人間文化論叢 (お茶の水女子大学大学院人間文化研究科)7: 285-299.

山本理佳 2005. 佐世保市行政による軍港像の創出—1960年代の米軍原子力艦艇寄港反対運動をめぐって—. 地理学評論78(10): 634-648.

山本理佳 2006. 近代産業景観をめぐる価値—北九州市の高炉施設のナショナル/ローカルな文脈. 歴史地理学48(1): 45-60.

山本理佳 2006. 東田第一高炉. 北九州地域史研究会編『北九州の近代化遺産』232-237. 弦書房.

山本理佳 2008. 住民らが守り通した東田第一高炉の景観. 地理53(3): 92-95.

山本理佳 2010. 佐世保市における軍港景観の文化資源化. 国立歴史民俗博物館研究報告156: 71-96.

やまもと・りか (2007年博士課程修了)
明治学院大学 非常勤講師